



直言

四〇周年
高校教育発足

佐々木 享

現今の高等学校制度は一九四八年に発足したので、ことしはその発足四〇周年にあたる。

この新制度の高校には、旧制の中等学校とは違って、国民誰もがそこに学ぶことが期待される大衆的、民主主義的性格が与えられた。その意味で高校は、全く新しい性格の中等学校として発足した。しかし、高校進学率という新しい統計指標が一九五〇年について初めて公表されたとき、それは全国平均で四二・五%（男子四八・〇%、女子三六・七%）に過ぎなかった。高校は、その後四〇年の間に国民の要求と期待に応じて着実に発展し、今日では名実ともに国民教育制度の一環を形成するに至った。

高校入試制度のたび重なる改

悪、教育条件整備のおくれ、高等専門学校や専修学校高等課程という高校以外のバイパスの制度化など、高校教育四〇年の道程は平坦ではなかった。そしていまなお、能力主義の強化、多様化の名による選別体制の拡充など、高校教育制度の土台を掘りくずしかねない動きも絶えない。中退問題も深刻になっている。

高校教育四〇周年を、高校教育の民主主義的性格を問いなおし、これをゆがめようとするものとは教職員、父母が一致して闘い、そして教職員の教育力量を高めて高校を真に国民の期待に応える学校とするために、思いをめぐらす契機としたい。

（ささき・すすむ 名古屋大学 教授）